
異形狩り

蔵本たつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異形狩り

【Nコード】

N5708Y

【作者名】

蔵本たつき

【あらすじ】

重複投稿します。終わり方はあまり気に入っていません。
話はすぐ終わります。

「ねえ、あなた」

学校の帰り道を何かを忘れたような気分で、せつせと歩いていると急に後ろから声をかけられた。

後ろを振り返ると、緑色の髪をした少女が立っていた。

「名前は？」

「えーっと、佐上竜馬だけど……」

「才能があるわ。あなたには」

少女の真っ直ぐな瞳が僕を見ている。

「才能？ そんなのないよ」

そう、勉強もスポーツも対人関係も容姿も、何もかもが平均的にでき、何もかもが平均以上にできない。それが僕だ。

「いいえ、あるわ」

少女はそう断言する。そういえば何故髪が緑色なのだろう？ 不良なのかな？

「あの……」

僕が何か言おうとすると、彼女は急に「しっ！」と言った。

「来る……！」

何が来るのか、確認する前にそれは現れた。

それは異常なまでに筋骨の発達した紫色の犬だった。体長二メートルはある。

「うわぁッ」

思わずその場で固まった。

なんだ？！ 動物……にしては迫力がありすぎる。只ならぬ殺気で満ちていて、それは化け物と言ってよかった。

「現れたわね、異形……」

少女はこの事態に遭遇していながら、落ち着いて言う。

至って平静に、少女は右手を背中にまわした。それが返ってきたときには、少女は斧を持っていた。

少女と斧。そのミスマッチな組み合わせが、漫画の世界を思わせる。

だが、これは現実。おそらくあの異形は、僕の敵。そして少女は僕の味方。

異形の犬が少女に向かって短く唸った。その声は周りに邪魔されないように、速やかに僕と彼女を殺そうとしている感じの声だった。「来いッ！」

少女は叫ぶとその斧を異形の犬に向かって振り下ろした。

そう目で見た時には、犬は僕の左足に噛みついていていた。

あまりの痛さに声も出ない。斧の攻撃はどうやら一瞬で避けられたいらしい。

「大丈夫?!」

少女が叫ぶ。それを聴きつつ、僕の意識はフェードアウトした。

次に目を覚ました時は、僕は真っ白な空間に居た。

しかし、さっきまで感じていた痛みはない。何となく落ち着く空間だった。

目の前には真っ白な衣に身を包んだ老人と、さっきの緑の髪の女の子がいた。

僕がここは？ と訊く前に、老人は話し始めた。

「つらい目に遭わせてしまつてすまない。佐上竜馬君」

「ごめんね」

少女は謝ってきた。

「ここは君の住んでいた世界とは違うのだよ。君たちの言葉で言う、異世界だ」

「異世界？」

聞き慣れない言葉に耳を疑う。だが、嘘を言っている様子はない。「そう。そして私はこの世界を管理する者だ。そしてこの子はその助手。言ってみれば、神と天使かな？」

「おじいちゃん、それは大げさよ」

「おお、そうだな。とにかく、君を襲ったような異形たちがこの世界に侵入してきたのだ。それを君に何とかして欲しい」

「何とかと言われても……僕はただの中学生ですよ」

「大丈夫。この世界には、想像力で魔法のアイテムを作り出せるという、便利な機械があるんじゃない。君の想像力は君の世界で一番だった。だから君を選んだのだよ」

想像力……？ 確かに僕は一日中、中二的な空想をして生きてきたが。

そんなにすごかったのかな？

「さあ、早くこの機械を頭に着けて」

少女が僕の頭に、ヘルメットのような物を被せた。

「これがその機械ですか？」

「そうだよ。頼む、君だけが頼りなのだ。他の世界からの干渉は一度きりと決まっている。これが最初で最後のチャンス。これに失敗したら、この世界は異形の支配する世界になってしまうだろう……！」

そんな大役をこの僕がか。人生、何があるか分かったもんじゃない。

「頑張つて、最高の魔法アイテムを生み出して！ できれば異形を一瞬で他の世界に戻すようなアイテムを！」

そんなこと言われても、何せ初めてのことだし……とにかく集中

だ。

「えいつ！」

気合いとともに、僕が作り上げたアイテムは、魔法のステッキだった。

「……………」

場の空気が凍りつく。

「え」と、これで変身して異形を倒せば良いんじゃない？」

とりあえず言ってみた。

「ふむ、まあいけるかもしれん」

「私がやるの？　なんか恥ずかしいな」

こんな物を発想した僕が一番恥ずかしいわ！

とりあえず、緑の髪の少女がそれを使うことになった。

「え」と、どうやって使うんだろう？」

「多分、振れば良いと思う。何か唱えながら……………」

「じゃあ、ピロリロリ〜ン！　変身！」

少しノっていた気がするのは僕だけだろうか。

とにかく。少女が叫ぶと、一瞬で魔法少女っぽい格好になった。

全体的に緑色のコスチュームなのが、緑の髪に合っていた。

「ほう、これで異形を退治できるのだな！」

「すごいわ！　ありがとう、竜馬君！」

ははは、これで上手くいくなら、それでいいや。

「じゃ、元の世界に戻して下さい」

「いや…………それが言いにくいんじゃないが、もう君は元の世界には戻れんぞ」

「ええ?!」

「この子のサポートを頼んだ！　では二人をこの世界の村に送ろう」

！ 安心してくれ、その村にはまだ異形はいない」
「そんな急な！」

「竜馬君、一緒に頑張ろうね」
「ってそんなこと言われたら後戻りできないし！」

こうして僕と緑髪の少女はこの世界の村に飛ばされた。

「ここが村……？」

「へんね、人っ子一人いないみたい……」

僕らが話していると、異形の者が現れた。

「おかしいな？ この世界は全て我らデモンが侵略したはずだが……」

……」

何だと？ もう世界は終わっていた？！

「あなたたちがこの世界を侵略したのね！ 許せないわ！ えい！」

そう言っつて少女がステッキを振ると、魔法少女に変身した。

「それ、もう一回！」

そしてもう一度振ると、急に時空が歪んだ。

「な、何だこれは？ うわあ〜！」

僕は元の世界に飛ばされた。

「いてて、何でまた」

僕は帰り道にいた。記憶が飛んでおり、何かを忘れたような気分だ。

僕はせつせと帰り道を歩いた。

（後書き）

終わり方がなく。途中までは楽しんで書けました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5708y/>

異形狩り

2011年11月17日03時26分発行